

第2章 再現屋、呪いの館の謎に挑む 3

21 おきて 掟破り

午前一時。

時計の針の遅いこと。朝は永遠に來ないんじゃないか？

加東がゆらりと立ち上がった。

「トイレに行く。いっしょに來てくれるのは誰かな？」

ここに戻ってすぐ、みんなで取り決めたのだ。今後一切、単独行動をしないと。だからトイレに行くにも必ず誰かが付き添う。提案したのはオレだが、全員一致で可決された。

「行きましょう」

気は進まなかったが、義務感で手を挙げた。

「教えてほしいんですけど」

用を済ませ、手を洗いながら訊ねた。

「ん？」

「加東さん、幽霊を退治するアテがあると言っていましたよね」

「ああ、あの話か」

加東はトレードマークの笑みを浮かべながら、もったいぶるような態度で腰に手を当てると、

「プロに頼むんだよ」

「プロ？」

「お化け退治のプロっていったら、決まってるだろ」

「……ゴーストバスターズとかエクソシストとか？」

「そうそう、それだよ」

加東は手を叩いて笑った。訊いたオレがバカだった。

「ウソじゃないぞ。知り合いにいます。自称『ゴーストぶつとばすたーず』てのがな、待てよ、あれは野球チームだったかな」

その時、軽い震動を感じた。加東も言葉を飲み込んだ。気のせいじゃないようだ。

急いで応接室に戻ると、全員の目が同じ方向を見ていた。

「志乃、またか？」

「あたしと違うで」

そんなことは分かっている。日村がさつきと同じ、西側の壁を指さし、

「帰ってきたんだ……」

とつぶやいた。すると町長がゆっくりと立ち上がり、脚を引きずりながら壁に近づいていった。

「――喜三郎か？」

あわてて志乃が駆け寄った。

「おじいちゃん、あれは息子さんやないよ。怪獣グテングテンやねんよ」

何だそれは？

「違う、あれは確かに喜三郎や！ ワシの大事な息子や！」

町長は志乃の手を振りほどくと、壁に張りつき、頬ずりを始めた。

「チックショー！」桐野が叫んだ。「これ以上ここにいたら頭がおかしくなっちゃう、どけ！」

放たれた矢のように桐野はドアに向かった。

その前をなまみさんが通せんぼした。

「どけよっ！」

桐野はなまみさんの肩をつかむと、力まかせに床に押し倒した。

「な、何をする！」

隆盛が桐野につかみかかった。だが運悪く隆盛の足がビールの空き缶を踏んでしまい、後ろ向きに床に転倒した。

うーんとうなって立てそうにない。

「ふん」

桐野はそれを見届けると、ドアノブに手を伸ばした。

その手をつかんだ者がいた。志乃だ。

桐野は逆上した。

「オレの邪魔する奴は一人残らず——」
ゴスッ。

志乃の右アッパーが桐野の顔にキマった。

桐野は三白眼をかつと見開いて、ゆっくりと絨毯の上に倒れた。

「おみごと」加東がつぶやいた。

みごとなものか。とんだ立ち回りだ。やるに事欠いて、パンチはないだろう。

志乃は膝をつき、桐野の襟首をつかんで起こすと、パシッと平手打ちを喰らわせた。うつすらとまぶたを開く桐野に、

「あんた、推理小説を読んだことないんか？」

「……………」

「よくある定番の展開っちゅーのがあんねん。今日みたいに、人里離れた屋敷に閉じ込められて、外にも出られへん、誰も助けに来えへん。そんな陸の孤島で一人また一人と殺されていく。どんな奴が真っ先に殺されるか知ってるかあ？ 自分だけは大丈夫やとうぬぼれて、一人つきりになるアホや。それからあんたみたいに取り乱して逃げようとする小心者や。なんで分かるやろ？ そのほうが殺人鬼にとつては都合がええからなんや」

志乃は桐野の首から手を放した。

「それでも行きたかったら、どうぞ。殺人鬼が待ってましたーって、あんたに抱きついてくるから」

いい終えると志乃は立ち上がり、床の上のなまみさんに手を貸して起き上がらせた。桐野は泳いだ目を巡らせ、みんなの視線が注がれていることを知ると、殴られた頬をさすりながら、バツが悪そうに部屋の隅へと退散した。

オレは志乃に歩み寄ると、ひと言だけ感想を述べた。

「グーで殴るのだけは、やめてくれ」

男のプライドってものがあるんだ。そう付け加えようすると、
「大丈夫。ほら、殴る前に指輪をはずしといたから」

と誇らしげに中指の付け根を見せた。

22 志乃の作戦

いつの間にか寝込んでいたらしい。膝をくすぐられて目が覚めた。志乃が人差し指で円を描いていたのだ。

壁の掛け時計が指す時刻は、午前三時半。

「まだ夜中じゃないか……ゲツ」

そこでようやく異常に気づいた。志乃の髪の色が黒かったのだ。

「しっ、静かに」

志乃は唇に小指をあてると、手を引いてオレをソファの陰へと連れて行った。

「おい、その髪、いつ染めた？」

「ウィッグですー」と髪の毛を持ち上げて見せる。確かに下は金髪のままだ。「念のため、商売道具一式は持ってきててん」

「かぶり物かよ」まったく、びっくりさせてくれる。

志乃は声を落とし、

「これから事務室に行つて、タカモリさんにインタビューしよ」
彼女はずっと隆盛のことをタカモリと呼び続けている。

「マネージャーに？」

「そう」

「こんな時間に？」

「そう」

「なまみさんにしたかったんじゃないのか？」

志乃がすつと指さす。なまみさんはソファにもたれてうたた寝中だった。こんな状況ではアイドルも一般人もないな。同じ難破船に乗った仲間だ……それでも彼女がお姫様であることは間違いないが。

「アイドルはあと。ショーをインとホイッスルは……えっと」

《将を射んと欲すれば先ず馬を射よ》と言いたいらしい。

志乃は器用に手を動かし、前髪を額の上に垂らした。

「——まさか、お前」

ノックして事務所のドアを開けると、隆盛はひとり黙々と書類に目を通していた。超多忙アイドルのマネージャーともなると、昼も夜もない毎日に違いない。応接室に固まろうという呼びかけにも頑として応じず、自分の領土を守っている。マネージャーは気力と体力がないと続かないんだろうな。

「どうしました」

「あの一、なまみさんが呼んでるんですけど」
もちろんウソだ。志乃の指示である。

隆盛は書類を机に置くと腰を上げた。

「彼女は応接室ですね？」

「それが」目線をさりげなく上げてみせ、「二階の展示室に来てほしいとか」

「二階に？」

隆盛は眉をひそめたが、分かりましたと言って事務室を出ると、すぐに階段を昇っていった。

「なまみさん、どちらですか？」

「——こっちです」

隆盛は展示室の入口ゲートをくぐり、奥へと歩を進めた。もちろん明かりはない。避難路を示す非常灯だけで、へたに歩くと展示物にぶつかりそうだ。

見えないなまみさんに、隆盛は声だけを頼りに近づいていく。

「緊急の御用事でしうか」

「——幽霊騒ぎの件です」

隆盛は足を止めた。

……勘づかれたか？

オレは彼の後ろを、足音が立たないよう、裸足になって尾行していた。夏とはいえフローリングの床はちと冷たい。そして手にはビ

デオカメラ。映像は無理でも録音は可能だ。

隆盛が話している相手。お気づきだろう、なまみさんではなく、志乃だ。彼女が得意の演技でなまみさんのフリをしているのだ。

マネージャーを騙せるわけがない。オレは反対したが、「バレたら退屈しのぎの冗談でしたと謝るだけ」と志乃は軽く言っただけ。彼女は何かをつかんでいるらしい。

なまみさんにインタビューを求めた動機もそれだった。なまみさんには後日まわしにされたので、それなら、と隆盛に照準を変えたのだ。

『あの人にも確認してみたいねん』

志乃はそれだけしか口にせず、詳しく聞く暇もないまま、こうして本番に突入した。

「騒ぎの件、ですか」

隆盛の表情は皆目見えない。

オレはハラハラしながら、耳に神経を集中させた。今にも志乃だとバレるんじゃないか？

「——昨日の夜、渡り廊下でガラスの外に幽霊が現れる直前、私はあなたに何と言ったか覚えてますか？」

長めのセリフだ。

驚いた。まるでなまみさんがしゃべってるみたいで、間の取り方や言葉の抑揚がそっくりだ。完璧じゃないにしろ、広い展示室の中だ。多少はごまかせる。

あらためて、志乃の才能に恐れ入った。

それにしても気になるのはセリフの内容である。さっぱり意味が分からない。あの時、渡り廊下には隆盛はいなかった。町長らの相手をして、A館の一階に残っていたはずだ。

目が暗さに慣れてきた。非常灯の光が、志乃と隆盛の輪郭を赤く染めていた。

「覚えてますが……」

通じてる！

「——言ってみて」

「え……」

会話は謎を秘めたまま続いている。どういうことだ。

何か見落としたことがあるのか。オレが気づかず、志乃が気づいたこと……志乃が気づいた……。

そうだ。ガラス越しの幽霊が消えた直後。

志乃は廊下でなまみさんの携帯電話を拾った。

オレの思考に、隆盛の声がかぶさった。

「……あなたはこう言いました。『廊下に到着した。今よ！』と」
ガツンと頭を殴られた思いがした。

心の中にかかっていた靄もやが、ほんの一部だが、さーっと晴れた心地がした。

「——そう、それであなたは指示どおりに動いてくれました」

志乃はなまみさんになりきっている。うっかりするとオレまで騙されそうだ。姿がはつきり見えないからこそ実行できた作戦だ。

「もちろんです。あなたの御希望を実現するため、最大限努力するのが私の役割ですから」

「——でもこれで良かったのかしら。私は大変なことをしてしまっただんじやないかしら。そう考えると気が休まらなくなっつて」

「しかたがなかったのです。こうでもしないと、あなたは永遠にこの美術館の館長を辞めることはできないでしょうから」

館長を辞める？　また意味不明だ。館長就任は彼女の意味だったはず。

「それに」隆盛は続ける。「昨夜のことだって、あなたのがんばりには舌を巻いていたんですから」

昨夜？

「——本当に。着ぐるみ姿でみなさんを廊下まで誘導するのには、正直とても骨が折れました」

なにーっ！　二度目のショックにオレは卒倒しそうになった。

あの《綿ボコリ》の正体はなまみさんだったというのか、志乃！

「——でも、ゲストにひどい怪我を与えてしまいました」

「何をおっしゃる！」隆盛の声に動揺めいた感情が混じった。「誰かが怪我すれば、それだけ説得力が増すと主張されたのは、あなたではないですか、なまみ様」

なまみ・サマ????

突然、彼らを包む空気が変わった。

隆盛は、まるでなまみさんの奴隷にでも成り下がったような口振りになっていた。この二日間眺めてきた二人の関係からすると、かなり違和感を感じる。

志乃が扮するなまみさんはノーリアクションだ。すると隆盛が高ぶった声で、

「なまみサマ？——すみません、お気を悪くされたら謝ります。お許してください」

次の瞬間、ドンと大きな物音がし、何か硬い物の割れる音がした。驚きのあまり息を飲んでいると、さらに耳を疑うようなセリフが展示室に響き渡った。

「あんたねえーっ、あたしに口答えするつもりいーっ！」

23 幽霊の正体

ここで話は本エピソードの冒頭に戻る。

オレは文字どおり、驚愕した。

続いて頭の中をパニックの嵐が吹き荒れた。

自分の見ている光景が信じられなかったのだ。

オレの目の前には、想像を絶する化け物がいた。

あるいは、妖怪変化と呼んでもいい。

しかし、いまオレがいるこの場所——呪われた美術館では何が起きて、どんな化け物が現れても、これほどふさわしい舞台はないと言っても過言ではないかも知れない。

妖怪変化の正体は志乃である。ついさっきまで普通の人間だったのに、いきなり豹変した。女だから女豹めひょうと称すべきか、それとも女狐めぎつねか？

あまりの変貌ぶりにオレは凍いた。

打ち合わせと全然違うじゃないか。

なまみさんになりすまし、二、三、質問するだけですぐに引き上げるんじゃないのか。

隆盛は、いや彼となまみさんは、明らかに今回の一連の事件に関与している。それどころか、我々ゲストは二人の手の平で踊らされていたのかもしれない。志乃がどうやって彼らの尻尾をつかんだのかは分からないが、ここまでの隆盛の会話はそのことを裏付けている。あとは逃げるだけ。そのはずだったのに――。

志乃は、突然、キレた。

彼らにハメられていたことに、怒りが抑えられなくなったのか。そうなると思態は悪い方向へと転がる怖れがある。

志乃はなまみさんを演じることを放棄した。自ら正体をバラした。するとどうなる？

秘密を知ったオレたちを、肉体派の隆盛が黙って帰すだろうか？ヘタをすれば、殺されるかもしれない。

志乃――。

いったいどんな勝算があるっていうんだ！

「あんだ、それでも国民的アイドルのマネージャーかい！」

肩を怒らせた志乃のシルエツトが隆盛に迫る。お前はヤンキー娘か！ そんななまみさんがおるか！

いや、ツツコンでる場合じゃない。助けなきゃ、助けなきゃ！すると、状況はまたしても予想外の展開を見せた。

暗がりの中で、隆盛は土下座したのである。

――口封じのため、隆盛が志乃に襲いかかる。そんな最悪の筋書きを予想していたのに。

「すいません！」隆盛は頭を床にこすりつけた。「出過ぎたことを申しました！　どうかお許しを！」

Tシャツの中の筋肉がモリモリと動いている。そんな強面男が、志乃ごときの罵声を受けて萎縮しまくっている。

もう何が何やら。

ぽかんと口を開けていると、突然、周囲が眩しい明かりに包まれた。天井の照明に灯が入ったのだ。

「そこで何をしているんですか！」

女性の声が耳を撃ち抜いた。それは鳥のように美しく、そして刃物のように尖ったエッジを含んでいた。

入口ゲートに現れたのは、ホンモノの綾澤なまみさんだった。

つかつかと展示物の間を歩み寄ってくる。その顔は明らかに怒っている。マズい。

「説明して！　何を大声で話してたの」

なまみさんは照明の一つがうまく顔に当たる位置で立ち止まった。まるでそこがマイクの立てられた定位置であるかのように。

それに対して隆盛はこれ以上ないほど両目を見開き、

「な、なんで、なまみ様が二人？」

と驚いた。

おかしいぞ。関西弁で怒鳴りつけた志乃の声を、まだなまみさんだと思ってるのか？

有能マネージャーは、絵に描いたようなあわてぶりを示しながら、顔をキョロキョロさせた。

なまみさんが指をさす。

「よくごらんなさい」

「は——ありゃ、おたくは再現屋さんじゃないか！」

志乃はウィッグをはずしてお辞儀した。

「こ・ん・ば・ん・わ」

隆盛はまだ状況が理解できずに口を開けっ放しにしている。

広い展示室の中。オレ、志乃、なまみさんが三角形を作って対峙

した。

志乃は手のウィッグをクルクルとまわしながら微笑んでるだけ。オレにしても、この場をどう繕うべきか分からずにいた。とりあえずビデオカメラを持つ手は下ろした。録音は続行中だが。

「……私のマネージャーから、何かお聞きになりました？」

シビレを切らしたのはなまみさんだった。すると志乃は、

「タカモリさんはすべてを告白してくれましたよ。あなたにそそのかされて、幽霊騒ぎを起こしたって」

「起こした？ あれはこの美術館に取り憑いた霊が——」

「違うな。幽霊なんかそもそもおらへんかったんよ。全部、あんたらがでっち上げたこととやってん。そんで首謀者はあんた、なまみさん」

「まさか！」なまみさんはアハハハと笑い、「そんなことをして、私にどんなメリットがあるというんです？ やったとしたら、彼が一人でやったんでしょ」

「——それは無理でしょう」

新たな声の参入に全員がハツとした。

白スーツの加東がそこにいた。美術館にいる者で、Tシャツ姿じゃないのは彼だけだ。

加東はコツコツと足音を響かせて近づいてきた。

「昨夜の幽霊追跡劇。あの場には、みんなを決めた時間に渡り廊下へ誘導する人間と、襲いかかる怪物を操る人間。この二人が必要だからね」

驚いたことに、加東は志乃のセリフを補強するようなことを口にした。

「そやね」志乃がウンウンとうなずく。「そやから《綿ボコリ》がなまみさん。怪物の係がタカモリさんやった」

本当か？

なまみさんの顔をうかがう。すると彼女は志乃をにらみすえ、「証拠はあるの？」

と詰め寄った。

そうだ、証拠だ。これまでのところは隆盛の自白と志乃の勝手な推理だけだ。状況証拠としては乏しいと言わざるを得ない。

すると志乃は、そばに置いていた自分のバッグをまさぐると、くしゃくしゃになった一枚のTシャツを取り出し、両手で広げてみせた。

「なまみさん、これはあんたが夕べ脱いだTシャツ。ほらここに」と首の部分を裏返し、「N・Aって書いてある」

「それが？」

なまみさんの声がわずかに動揺した。

「よお見て、ここ」と志乃は袖の部分をこちらに示し、「破けてるやろ。これは《綿ボコリ》に変装してみんなから逃げてる時に引っかけた跡やねん」

24 布切れ

ここは進行役に徹しよう。

「志乃、そのTシャツはどうやって手に入れた？」

「ゆうべ、怪我した岡田クンを運んだりして、汗まみれ泥まみれになったから、なまみさんに着替えのTシャツをちょうだいて頼んだ時、脱いだのは洗濯室のカゴに入れといてって言われてん。で、さりげなくチェックしたら、その時のなまみさんが着てたTシャツは破れてなかった。ハハン、着替えたなと思って、洗濯機を開けたら、そこに入ってたんよ」

「チヨロまかしたのか」

「証拠を押収したんやん。人間き悪いなあ」

オレの茶々に志乃は口を尖らせた。

なまみさんは険しい表情でアゴを上げると、

「そんなの意味ないわ。別の用事をしている時に破れたのよ、きつと」

「隠してもムダやつて——トシ、ビデオを巻き戻して」

オレに昨夜の追跡シーンを再生しろと指示する。ひとまず録音を中止し、《綿ボコリ》が壁に見え隠れする場面をサーチした。

思い出した。あの時、足音らしきものを耳にしたんだっけな。

映像は《綿ボコリ》がC館へと向かう階段を移動する場面に差しかった。

「ほら、ここ」

志乃はオレの手からカメラを取り上げると、なまみさんに捧げるように突きつけた。

何が映つてるといふんだ。あわててなまみさんの横に回る。隆盛もおれにならって床から立ち上がった。

《綿ボコリ》は北向きの階段を昇りきると、勢い余って正面の壁にぶつかった。階段はその踊り場から左右に枝分かれしている。

《綿ボコリ》は壁をこすりながら右へと駆け上がったいく。

志乃の指がポーズボタンを押した。

「あっ」

思わず声が漏れた。

壁に小さな布切れが見える。色はグリーン。直前にはなかったのに！

どうしてこれが映っていると志乃は知っていたんだ？ 問いかけようとして思い出した。ついさっき、応接室でオレがうたた寝していた時、こいつはなぜかビデオカメラを手の中に持っていた。なるほど、あの時にチェックしていたのか。

それはともかく。

布切れは確認できたものの、走りながら撮ったせいで映像は明瞭さに欠けた。

「見た目はただの壁なのに、どこに引っ掛けたというんだ……」

つぶやいていると、オーイと呼ぶ声がした。

いつの間にやら、加東はB館へと向かう階段にいた。おいでおいでをしている。どうやら現場に行つて話をしようということらしい。

有能キュレーターの強引さに引きずられ、四人はそれぞれの思いを抱いたまま彼に続いた。

B館の北、問題の階段の手前まで来ると、加東はにやにや笑いながら、踊り場で腰に手を当て、仁王立ちしてオレたちを待っていた。そして全員が到着するや、踊り場の端へとゆっくり移動した。

そこには大きな額縁が掛かっていた。ガラスの中に油彩画が見える。絵画については全くの素人だが、どうやら抽象画の部類に入る作品らしい。中央に人物らしきものが描かれてる。よく見ると人物の身体は灰色のふわふわした綿に包まれていた。

加東は額縁に向き直った。そして両腕を開いて額縁をつかむと、気合いと共に持ち上げた。

額縁はかなりの重量があると思われた。加東はそれを脇に立て掛けると、ふーっと息を吐いた。

額縁の取り払われた壁には、スチール製のフックが打ち込まれていた。

あわててビデオの映像を見直す。

フックと布切れは、同じ位置にあった。

「タカモリさん、額縁をはずしたんは、あんたやね？」

隆盛は崩れ落ちるように、床に座り込んだ。

「前もって予行演習でもしたんと違う？^{ちゃ} それでなまみさんが必死で逃げてきたら、額縁にぶつかってガラスで怪我するかもと感じた。だからどっかに片付けた」

なまみさんたちは答えない。

志乃は短パンのポケットをまさぐった。取り出したのは、問題のTシャツの切れ端だった。インシヤルN・AのTシャツの破れた部分にあてがうと、パズルのようにピッタリとはまった。

「一人でこっさり戻って探してん。そしたらこの踊り場の隅に落ちてたわ。タカモリさんも気いつかへんかったんやね」

「そうか！」

オレもあることに気がついた。

階段を駆け上がる。《綿ボコリ》を追跡したように、右側の階段だ。上がりきって渡り廊下のほうを見る。風雨の侵入を防ぐために、今は重い防火扉が通せんぼしている。オレは記憶を頼りに扉のそばまで行ってみた。

それは、そこにあつた。

「やっぱりだ。ここでオレは不審な音を聞いた。カチツという金属音だった」

防火扉のすぐ手前、右側の壁。そこにあつたのは『関係者以外立入禁止』と書かれたドアだった。同じものがA館にもあつた。最初に館内を見学した際、なまみさんはA館のこの扉を、自らカギで開けてみせた。

そうだ。《綿ボコリ》の着ぐるみを脱ぎ捨てたなまみさんは、あらかじめ開けてあつたこの扉の中に飛び込んだのだ。そしてオレたちが追いついてきた時、静かにカギをロックした。オレが聞いたのはその音だったんだ。

あの時、冷静になって考えていれば、関係者しか入れない場所に逃げ込んだことに気づいたかもしれない。そうすれば犯人に結びつく材料が手に入ったかもしれない。

犯人――。

振り返ると、なまみさんは目を閉じて、静かに立ち尽くしていた。まるでコンサートで全曲歌いきった後のように。

本当なのか？

本当にこの一連の事件、騒動の首謀者は、国民的アイドル・綾澤なまみなのか？

分らないことだらけだ。たとえば、渡り廊下を破壊した怪物の正体。

でも一番分らないのは動機だ。

美術館の館長を辞めるため、と隆盛は言った。おかしい。館長就任はなまみさんの意思だったはずだ。

彼女に質^{ただ}さねばならない。そこにどんな恐ろしい事情が隠されて

いたとしても。

25 夜明け

「くそつたれーっ」

突如、女声の金切り声が耳の奥にキーンと突き刺さった。オレは顔をしかめ、

「志乃、もういい、やめろよ」

と注意すると、

「わたしやないで」

冷静な声が即答した。

「え？　じゃ——」

誰だとその場を見渡しても、女性是他に一人しかいない。

叫んだのは、なまみさんだった。彼女は床に膝をついて、こぶしを床に激しく打ちつけていた。

「くそ、くそっ、もうちよいやったのに、もうちよいでうまくいったのに！」

ガツン、ガツンと何度も。

関西弁だ。な、なにゆえ？

「綾澤町って、このY町のお隣やて知らなかった？」

がーん。そうだったのか。——いや、そうじゃなくて、

「『なんでオレの考えてることが分かった』かって訊きたいんやろ。トシって、見た目とおんなじくらい単純やからなあ」

「そうじゃない！」

なまみさんのこぶしに血がにじんだ。彼女は手を止め、しばらく広げた指を眺めていたが、よろよろと立ち上がり、隆盛のそばへとにじり寄った。

泡を食って逃げようとしたのは隆盛だ。しかしなまみさんは隆盛のベルトをつかむと、その巨体を背後からブルンブルンと振り回した。うわーと叫んだ隆盛はなまみさんの手を離れ、壁に頭から激突

した。

なまみさんの影が床の上に伸びている。息を荒げ、肩を上下させるその姿はまるで、まるで……とにかく、アイドルなんかじゃない。「お前がペラペラしゃべったせいでな、ぜーんぶ台無しになってもうたやないか、この役立たず！——もうおしまいや。これまで築いてきた何もかも」

なまみさんとはとてつもない剣幕でまくしたてると、エネルギーが切れたように、がっくりと肩を落とした。

もしかして——。

「これが、なまみさんの、地？」

「そういうことやね」志乃がつぶやいた。

「知ってたのか？ 知ってたからキレた真似をしてみせたんだな」

「知るワケないやん」

しれっとしたものだ。

「じゃ、どうして」

「もー、うるさいなあ」志乃は興味をなくしたように、持っていた布切れをポイツと捨てると、「タカモリさん、あたしと話してる途中で、だんだん態度が変わっていったやん。なんちゅーか、シモベミたいに」

「ああ、わがままなお姫様に対する弱気な家臣って感じがした」

「その雰囲気に合わせてただけ。自然にああなったんよ」

志乃なりの役者の勘ってヤツか。

相手の俳優の呼吸に合わせて、自分の演技を敷衍させた結果、ひとりでに「キレた綾澤なまみ」が生まれた。ところが長年連れ添ったマネージャーの隆盛は、それをホンモノのなまみさんと信じて疑わなかった。

奇跡だ。

オレは驚嘆の眼差しで志乃を見た。志乃は大きな欠伸をすると、つむじの辺りを無造作にバリバリと搔いた。

夜が明けた。

目を覚ました田辺町長には、なまみさんの姿が見えないのを風邪で寝込んでいると説明した。

連絡があり、土砂崩れの撤去作業が早朝から再開され、早ければ正午には開通する見込みだという。

応接室の面々に伝えると、一同の顔に安堵の色が広がった。

若者三人組はなまみさんの部屋に見舞いに行かせると訴えたが、「ファンに疲れた顔を見せとうないんやて」と志乃が説明すると不承不承納得した。

町長は無惨なほど憔悴していた。最も大きな打撃を被ったのが彼だなのだから、それも当然だろう。大丈夫かと気遣う志乃にもわずかにうなずいただけだった。

「外の空気を吸いにいこう」

志乃を誘って、オレはエントランスを解錠した。

さわやかな涼風がオレたちを出迎えた。

昨日まで空を覆い尽くしていた雲は隅に押しやられ、今は眩しい陽光が木々の間から差し込んでいた。

反対に、美しく掃き清められていた前庭は、吹き飛ばされた土砂や散乱する木の葉で見る影もなかった。

美術館を振り仰いだ。

思いがけず三日間を過ごした宿は、クジラのようなその巨体を丘陵の上に静かに横たえていた。ここにはもう二度と来たくないものだ。

「屋根の上でヘンなのが動いてるね」志乃が言った。

「ああ、ハリネズミの針みたいだなと、オレも到着した日に思ったよ」

ふと、建物の西側、向かって左側の壁際にこれもまた変な物が落ちていたのに気づいた。砂利を踏みしだきながら近寄ると、それは土囊らしかった。なぜこんなものが置いてあるんだろう。しかも一つきり。

「太い縄が結んである」

「てるてる坊主みたいに、どこかに吊るしてあったのかな」

吊るすという自分の言葉につられ、オレは上を見た。すると屋根の端から縄の切れ端が覗いているのが目に入った。

待てよ、ここはみんなが寝泊まりした応接室のちょうど外側だ。

「行くぞ、志乃！」

エントランスに駆け戻ったオレたちは、そのまま階段を二階へと進み、入場ゲートをくぐって、A館北端にある関係者用ドアを開いた。カギは隆盛から預かっていた。彼は今、床に伏すなまみさんのそばに付き添っている。

ドアの向こうの狭い階段ルームは、下へ向かうのと逆に、上へも伸びていた。オレたちは上に向かった。

ぐるっと一周回ったところで階段は新たなドアの前に突き当たった。カギを開けてノブを手前に引く。

当然ながら、そこには屋根があった。しかしオレは踏み出しかけた足を止めた。

26 アイドルの本音

間近で見るハリネズミの《針》は、両手の指で作る輪ほどの太さがあった。《針》は湾曲した屋根の上に数えきれないほど生えていて、どれも一様に黒く、しかも風に吹かれてか、ゆらゆらと生き物のように揺れている。

数日前なら、奇妙な眺めに怖れをなしただろう。でも今のオレは幽霊騒動やらアレやコレやの連続で、感受性の一部が麻痺していた。何でも来いの気分になっていた。

敷居をまたいで、屋根の上に第一步を降ろした。

《針》と《針》の間に細い通路があった。この通路が水平に、時には短い階段となってカマボコ状の丸い屋根の上を走っている。志乃とオレはゆっくりと通路を進んでいった。

試しに一本の《針》に触れてみた。弾力がある。少なくとも外側はゴム製だ。漆黒の《針》を上へたどると、尖端には四角く薄っぺらい板が取り付けられていた。

「太陽電池だ」

見間違いようがなかった。板の上に並ぶ青いパネルの列は、明らかに太陽電池パネルだった。

「これ全部がそう？」

「だと思う」

無数の《針》の先に取り付けられたパネル。それらがゆさゆさと蠢くさまは、巨大なウニに乗っかっているようで気持ちが悪い。

「そういう、太陽電池では、世界有数の生産量を誇るメーカーがこのN県にはあったよな」

「その通り」

背後で声がした。

「また出た」志乃がうんざりした声を上げる。

「お嬢さん、このジャンⅡフランソワ・加東を幽霊みたいに言わないでほしいな」

まったく、いつも突然現れる人だ。

「何か御用ですか？」

「いやね、私も君たち同様、お払い箱になったので、今日でこの美術館ともお別れだ。ひと渡り見学して回ろうと思ってね」

今朝方、なまみさんをベッドに寝かしつけた隆盛から通告された。今日までの日当は払うが、オレたちの仕事は中止だと。

加東は俳優気取りで、サツと手を広げると、

「二年前、綾澤なまみが館長に就任する際、地元S社とのタイアップで太陽電池システムが導入されたんだよ。彼女のエコアイドルというのにも引っ掛けてね。おかげでこの美術館の電気の四割は、これら太陽電池でまかなわれている」

「ずいぶん詳しいんですね」

「そりゃそうさ。仕事を受けた際、ひと通り調査したんだよ。プロ

なら当然だけどね」

最後のひと言はグサツときた。携帯も持たず、インターネットとも無縁の生活。早く金欠生活から脱したい。

「お嬢さん」加東は志乃に顔を向け、「この風変わりの太陽電池パネルたちは、なぜこんなにフワフワと動いているのか分かりますか？」

「風が吹いてるからやろ」

「ノー、ノー、違うんですよ。パネルの向きをよく見てごらんない」

「……あー、みんなおんなじ方向を向いてる。それもお日様のほうや！」

志乃は世紀の大発見ばりに手を叩いて飛び上がった。こんな場所ではしゃぐな。

「そうなんだよね。一見自由に動いているようで、じつは電気への変換効率が高くなるよう、パネルの向きを太陽に向けていたんだよ。ひまわりのようにね」

「すごい、すごい！ 作った人、めっちゃ天才！」

さすがにオレも感心した。そんな仕組みがあったとは。

「もつとも、まだまだコストがかかりすぎるし、メンテナンスも大変だ。ここに設置されたのは、あくまでデモの意味合いが大きい」
「ふーん」

オレは志乃を置いて、通路を先に進んだ。そしてこの辺だと当たりをつけた場所に近づき、周囲をぐるっと見渡した。

「あった」

それは屋根の一番端から伸びた一本の《針》。パネルの手前に縄が結わえ付けてあった。

昨夜の怪物の正体はこれだ。《針》から吊るした土嚢が、応接室の外壁を叩いていたのだ。風雨にさらされて切れてしまうまでは。追いついてきた加東は「そんなことだろうと思った」とため息をついた。

「やったのはマネージャーさんですね」

「間違いないな」

「ロン毛の探偵さん」志乃がとっておきの笑顔を加東に向け、「もしかして、廊下を壊した怪物の正体も分かってるう？」

「当然。それじゃ現場に行ってみよう」

オレたちはドアへと戻った。

隆盛はまだほとんど何も説明してはいなかった。ただ、幽霊騒ぎはすべて二人が——正確には、なまみさんが指示し、隆盛が言われるままに動いて——やったことだった。

あの後、企みが暴かれ、感情をあらわにして悔しがったなまみさんはそのまま昏倒した。ひどい熱だった。

彼女をベッドに運んだ隆盛は、ぐったりとした顔つきで釈明した。「なまみさんは長年、エコアイドルと呼ばれ続けて疲れていたんです。デビュー直後はそんな肩書きにも乗り気でしたが、だんだんと押し潰されそうになって……。だって、有名になって稼げば稼ぐほど、彼女の周囲に寄付を募る連中が集まってくるんです。中には胡散臭い団体もありましたが、拒否してもしきれません。下手に断ればある事ない事書かれますし……。しかも、エコアイドル綾澤なまみは自分のためにお金を使うことが許されないのです。考えてもみてください。どこの世界にお金が必要なんって若者がいます？彼女にだってほしいものはあります。買いたい洋服もあるし、旅行もしたいのです。それを全部我慢して今日まで来たのです。それもこれも、有名になって毎日テレビに出ていれば、いつか自分を捨てた両親が迎えに来てくれると信じているからです……。とはいえデビューして五年、無理がたたって彼女は緊張の糸の切れることが多くなりました。想像できないでしょうけど、彼女は元来感情の起伏の激しい性質でしてね。表に出さないよう、キレるのは私の前だけにさせていたんですが」

館長辞任の件について問うと、

「Y町の人々から請われて、これも断れなかったんです。ところが

この美術館は予想以上の金食い虫だったんですね。このままではこれまで以上に儉約を要求される。限界でした。だから……だから、どんな手を使っても、彼女が館長を辞任する、美術館を手放す必要があったのです。……確かに、幽霊騒ぎは安直過ぎました。噂が広がって客足が遠のき、ここを手放さざるを得なくなれば、などと彼女が提案したものですから——」

なまみさんの癩癩かんしゃくに付き合っているうちに、彼女を「様」付けで呼ぶようになり、もはや彼女に否やを言えなくなってしまうていた隆盛は、ただの操り人形に成り下がってましたと自虐的に笑った。聞けたのはそこまでだ。だからこうして志乃と探偵の真似事をしている。加東もいるが。

B館の階段室を昇る。ドアを開けるとさつきより一段といい眺めが遠望できた。

「ほら、ここにいた」

「えっ、どこどこ」加東の指さす先を志乃が追う。

オレもならって目を大きく見開いた。

——これか。

「これでっか」

思いがけなく、背中越しに男の声がした。そしてシャッター音が続いて鳴った。

27 最終回

三人が振り向くと、そこでまたシャッターが押された。

「おはようございまーす」

芸能記者の阿佐ヶ谷だ。彼の存在をすっかり忘れていた。今までどこにいたんだろう。

構えた一眼レフカメラを降ろすと阿佐ヶ谷は、

「ナニ、ナニ、これが噂の怪獣？」

とにこやかに説明を求めてきた。

オレと志乃はきつと困惑の表情を並べていたはずだ。ところが加東は違って、やあおはようなどと手を挙げて挨拶した。

「キミもいっしょに見るかい」

「えへへ、よろしいので？」

「もちろんだ。さあ行こう」

阿佐ヶ谷の肩に手を回して案内するではないか。

やむなくオレたちも続いた。

B館の屋根にもA館と同じく、太陽電池パネルの《針》が林立していた。

その中に一本、不自然に折れ曲がった《針》があった。先端に取り付けられた太陽電池パネルはひび割れ、半分以上のパネルが剥落していた。

志乃は呆然とした顔で近寄り、折れた部分に手をあてた。

「これが、怪物——」

「そうらしいね」と加東。「みんなが渡り廊下に入った瞬間、これが根元から回転し、パネルのある先端部分でガラスを割ったのさ」

なんてことだ！ 呪いかと思いきや、正体は最先端技術の太陽電池パネルだったなんて。

「こない真っ直ぐ空に伸びてるのに、真横にある廊下を壊したりできるんやろか？」

「調査したところでは」加東は手帳を開いて目を落とした。「パネルを支える軸、そちらのカレ氏のいう《針》だが、通常、電気を最も効率よく生み出せる配置になるよう、最適化プログラムによって管理されている。ところがシステムはまだ試作段階だから、事務室のパソコンからマニュアルで設定を変更できるんだ。《針》の傾きもふだんはリミッターがかかっているものの、マニュアルにすればそれがなくなる。すなわち完全に自由に動かすことができる。おそらくマネージャー氏がやったんだろうね」

オレはUターンすると、階段室へと駆け戻った。ドアの脇にあるはしごを昇り、階段室の屋上に上がろうとした。そこがB館では最

も高いところだからだ。

本当にあの《針》は渡り廊下まで届くんだろうか？ 自ら確かめたい。

四角く狭い屋上には、数本のアンテナが立っているだけだった。そのどれもが昨日までの強風で折れ曲がっていた。

しかしオレの目を捉えたのはアンテナではなかった。アンテナの一本にしつかりとくくりつけられた、人型の縫いぐるみだった。

オレは立ち上がると、志乃たちに手を振った。

「幽霊は、ここにいた」

「あなたがたのおっしやった通りです」

隆盛はそう言つてうなだれた。

太陽電池パネルでガラスを割るからくりは、加東の指摘した通りだった。そして渡り廊下にオレたちを足止めするのに人型縫いぐるみを使ったことも隆盛は認めた。

縫いぐるみは、怪我をした若者らを運んだ後でひとり戻り、パネルからはずしてあそこに隠した。割れたパネルについては、いずれ新しい物に交換するつもりだったらしい。

「怪我をさせるつもりはなかったんです。ただ風を計算に入れてなくて、回転したパネルが想定した以上に深くガラスに突っ込んだのです。本当に申し訳ありません」

隆盛は深々と頭を下げて謝罪した。

オレたちは彼らのしたことをどこにも公表しないことを伝えた。もちろん警察にもだ。すべてはオレと志乃と、加東の胸の内。

「なまみさんには、来月から始まるコンサートツアーの中止を進言します。マネージャーとして、しばらく休養をとるよう説得するつもりです」

オレはここで撮影したすべてのビデオテープを隆盛に渡した。隆盛は「再現屋さんのことは一生忘れません」と涙を流した。結局、オレと志乃の名前は最後まで覚えてくれなかったようだ。まあオレ

も彼を「タカモリ」と呼んでたんだから、おあいこか。

エントランスに救援の車が到着したと聞き、全員応接室からぞろぞろと出てきた。歩けない岡田と桐野は担架で救急車に乗せられた。阿佐ヶ谷もカメラケースを肩にかけて出てきた。オレはアツと思いい、あわてて加東に耳打ちした。

「彼は怪物の正体を公表するかもしれせんよ」

だが加東は大丈夫だとウインクを返した。

「阿佐ヶ谷クンについても一応調べさせた。すると彼の経営する個人事務所に脱税の疑いが浮上してね。さっき、それとなくほのめかしておいたよ——おい、阿佐ヶ谷クン！」

大声で呼ばれた阿佐ヶ谷は、首をすくめて逃げるかと思いきや、ニヤリと笑ってお辞儀したではないか。

「全然懲りてませんよ、あの男。いいんですか？」

「問題ないよ。脅すだけじゃかわいそうなんで、ちよつと面白い芸能ネタを教えてあげたんだ。世の中、プラスマイナス両方がなくっちゃね」

また驚かされた。この加東という人物。底が知れない。

「加東さんはいろんな情報源を持つてるんですね。今回は非常に勉強になりました」

「そうかい。そりゃよかった。まあ情報源というか、彼らはみんな私の経営する会社の社員なんだよ。いろんなジャンルのエキスパートを集めていてね。再現屋さんも今後何か困ったことがあったら、電話してくれたまえ。とくにあのお嬢さんからだったら大歓迎だよ」

加東はそう言って名刺を差し出した。そこには彼が代表取締役を務める社名が書かれていた。

『株式会社 ゴーストぶつとばすたーず』

なんだよ、野球チームじゃないじゃないか！

キツくて苦しくて怖い体験の連続だったが、最後にうれしい話がひとつ。

なまみさんも救急車に寄せられ、全員が救助隊の車に分乗して美術館を後にした。そして車が途中の土砂崩れ現場に差しかった時。道路の復旧作業に従事している人々が、作業の手を止めて一力所に集まっていく。乗っている車が停止したので見ていると、土砂の中から人間が引っ張り出されようとしていた。

「き、喜三郎！」

町長がドアを開けて飛び出した。オレたちも車を降りた。

泥人形に近づいてみると、まさしくそれは飯山町議だった。

救護班が駆けつけた。しかし彼らの仕事はほとんどなかった。なぜなら泥人形が、

「と、とうさん」

と自らしゃべったからだ。

まさかの奇跡。聞けば、襲いかかってきた土砂にすっぽりと飲み込まれたものの、顔だけが表に出ている状態で、ずっと一昼夜、助けを呼び続けていたらしい。

「ろくでなしが！　どこまで親に心配かけたら気が済むねん！」

「ごめんなさい、お父さん」

町長も元氣を取り戻して、めでたし。

「なまみさん、元氣になったらええね」

帰りの電車の中、志乃がしんみりとつぶやいた。

「芸能人も売れかたによつては悲劇だよな」

「もしもやで」志乃は両手を胸にあてた。「ご両親が名乗り出てきたら、あのコ、幸せになれるんやろか？」

「分かんよ。誰にも分かん」

「そんな……幸せになれると思ってないややってられへんわ、きつと」

「……………」

会話が途切れた。何だか気まずい。

「なあ、志乃。えーと、ひとつ教えてほしいことがあるんだけど」
「……なに？」

「田辺町長と話してた時、ヘンなことを口走ったよな。『怪獣グテングテン』がどうか」

「あーあー」ブンブンと髪を揺らしてうなづく志乃。「あれは劇団におった頃の話でな。舞台がはねて飲みに繰り出した時、べろべろに酔っぱらった仲間のことをそう呼んでたんよ。こいつ、グテングテンに化けよったーって」

「なあんだ。聞いてみれば他愛のない話だな」

「悪かったねえ。そうや、今日これからあんたの実家に行つて、あたしもおじいちゃんにひとつ教えてもらお」

「じいちゃんに？ 何を？」

すると志乃は両手を膝の上に置き、まるでじいちゃんを目の前にしているようなポーズをとって、

「トシがカミナリを怖がるのは、どうしてなんですか！」

「ま、待ってくれ。それは家族には、ずっと秘密にしてきたことなんだ！」

「コワイーコワイーカミナリさんコワイー」

「許してくれーー」

おまけ

綾澤美術館の閉館が正式に決まった日から、一週間後。

館内に所蔵してある数々の美術作品を他の施設に移送すべく、数台の大型トレーラーが朝早くから駐車場に乗り入れてきた。

「テキパキやれよ。ただし高価な美術品が相手だ。慎重の上にも慎重にな」

リーダーらしき男性が整列した部下たちを前に言うと、部下の一

人が、女を扱うようにってんでしょ、とおどけてみせ、全員がドツと笑った。

まったくくだらないったらありやしない。こんな連中になど、美術品に触れる資格なんかない。絶対にない。

トレーラーからキャスター付き運搬車が降ろされる。リーダーがエントランスを解錠し、中に入れと部下に促す。リーダーは外に出ると、ポケットからタバコを取り出し、火をつけた。

待て。ここは敷地内全面禁煙だ。ちゃんと書いてあるだろ。

部下がやってきて指示を仰いだ。リーダーはすべて心得ていて、ああしてこうするんだと説明した。いつの間にかリーダーはA館の中に入っている。

こら、館内で吸うんじゃない。ほらみろ、灰が床に落ちてるじゃないか。しかもここには灰皿なんか置いてないんだぞ。吸った後はどうするつもりだ。

「さあ始めるか」

「はいっ」

部下たちが運搬用エレベーターへと進む。

おい、靴の泥を落としてからにしろ。そんな汚いままで乗るな。

「あれ……扉が開きませんね」

「おかしいな。元電源はオンにしたのか？」

「はい、ちゃんと」

部下がボタンをしきりに押している。それでも扉はウンともスンとも言わない。

「しょうがない。階段で行こう」

「了解」

一同は廊下を戻り、階段に足を掛けた。

うげげっ。泥を落とせというのに、こいつらときたら。

もう我慢の限界だ。

思い知るがいい！

「……リーダー、あれは何の音でしょう？」

「ん？」

ゴロゴロゴロゴロゴロ。

階段を昇りきった彼らの前に、丸い物が迫ってきた。

「何だ？ こっちに来るぞ」

「前に映画でよく似たシーンがありました」

「バ、バカッ、逃げろ！」

彼らは一斉に逃げ出した。しかしそこは階段の上、全員足を踏みはずして、コロコロと回転しながら落ちていく。

同時に、転がってきた木製の『木星』も、逃げる作業員たちの後を慕うように追って、階段を転げ落ちていった。

《再現屋、呪いの館の謎に挑む 完》